



※定住外国人子ども奨学金ニュースレターWeb版は個人情報などの都合上、内容を一部変更しています。

灘チャレンジ出展

「灘チャレンジ」は、阪神・淡路大震災の復興祭として始まった地域のお祭りです。現在は、震災継承だけでなく、障がい者や野宿者などの社会問題についても力を入れて開催されています。

私は、定住外国人子ども奨学金の学生ボランティアとして、9月18日に行われた「灘チャレンジ2022」に参加しました。「灘チャレンジ」に模擬店を出し、お祭りの来場者に定住外国人子ども奨学金の活動を知ってもらうこと、模擬店で利益を出し奨学金の資金を集めることが、私のボランティア活動の目的でした。

新型コロナウイルスの影響で飲食物を提供できなかったため、ハンドメイド商品の販売を行いました。出店の準備として、材料の調達や、商品の作成、完成した商品の値段設定、POPや募金箱の作成など、やることは山積みで初めての体験も多かったのですが、活動を通じて人の役に立てるやりのが、私の大きな原動力となり、最後まで活動をやりとげることができました。

当日は、台風の影響で開催が危ぶまれたものの、予定通りに出店することができました。客足が少なかったこともあり商品の売り上げて利益を出すまでには至りませんでした。他のボランティア団体の方や来場者への積極的な広報活動には取り組みました。

活動を振り返って、私が最も学んだことは、自分の知らない問題に意識を向けることの重要性です。大学の先生にこの活動を紹介されるまでは、外国にルーツのある子どもたちの現状を全く知りませんでした。しかし、「灘チャレンジ」の来場者に外国にルーツのある子どもたちの現状を知ってもらうためには、まず自分がこの現状を知る必要がありました。そこで、ニュースや映画を見て情報を集めることにしました。情報を集める中で、私が普段得ている多くの情報は、自分の興味から得られたほんの一部でしかなく、自分が知らない問題について如何に意識を向けていないかを痛感させられました。

このボランティア活動に参加することで、自分の情報に対する意識の向け方や、模擬店出店に際して必要な準備、人の役に立つことのやりのが、数えきれないほど多くのことも学び、成長することができました。今後もこの活動で得たものを活かし、外国にルーツを持つ子どもたちについて学び、関わっていきたいです。

(関西国際大学 Y.S.)

奨学生からのメッセージ

Kさん(15期生)

『言語について ~多言語を学ぶ苦しさや楽しさについて~』

私は6歳のころから日本語、広東語、英語、中国語を話すことができます。そして、私の話せる言語について何回もたくさんの人に色々な質問をされて来ました。例えば、「いつもは何語で考えているの?」「喋っていて混乱することないの?」など。そして1番多い質問は、「どうやって4つもの言語を学んだの?」です。この1番多い質問に関して書きたいと思います。

私はとても幸運なことに、幼いころに日本以外の国で暮らし、勉強する機会がありました。当時私はまだ5歳半で、母国語の日本語以外の言語に対する抵抗がまだあまりなく、その上頭もまだ柔軟だったのか、最初は全く現地の言葉、広東語が理解できませんでしたが、自分なりに頑張ってコミュニケーションしているうちに勝手に話せるようになっていました。今15歳の私には、到底できないことだと思います。中国語と英語は日本語や広東語ほど流暢ではありませんが、広東語と同じように、自然に習得した感じに近いと思います。

私は4つの言語を話すことができ、それらを学んできた過程について苦しいと思ったことは一度もなく、楽しくて、幸せだといつも感じています。それには色々な理由があるのですが、私の一番の理由は多言語を理解できることによって、視野がとても広がるからです。具体的に言うと、インターネットでニュース記事を読むときに、日本語の記事だけではなく、海外のニュース記事も見ることによって、その出来事への理解が深まったり、違う視点で考えることができたりします。それ以外にも、海外で現在流行っているものなどを、すぐに知ることができたりします。流行っているものを知ることによって、友達の枠が広がり、また視野を広げることができます。

当時5歳半だった私と今の私を比べると、今の私は新しい言語に対する抵抗があり、当時のようにすぐに習得するのは難しいことだと思います。ですが、それでも私はもう一つ言語を学びたいと思っています。なんの言語にするかはまだ明確には決まっていますが、これからの社会情勢に適應できるような言語にしたいと思っています。難しいことではありますが、頑張りたいと思います。

Rさん(15期生)

『学校生活について』

高校生になってからの学校生活について話そうと思います。私は去年、大変な受験期が終わり春から高校一年生になりました。高校生活はとっても楽しく、「おはよう!」と元気な挨拶から一日が始まり、お昼休みはバルコニーに行ってお日様にあたりながらお弁当を食べて、午後の授業は目の擦りながら受け、そして笑顔で「また明日ね!」と言う普通で何気ない生活けどでもそれがすごく楽しくとても充実した生活を送っています。そんな慌ただしい生活の中で私が頑張っていることは、勉強と部活です。

勉強は、中学と違ってとっても難しくなって毎日大量の宿題、予習復習、授業への集中ほかにもまだまだやる事が沢山あります。多すぎてたまに手が回らなくなりそうになることもあります。だけどその分小テストや定期考査でいい結果だった時はすごく嬉しいです。この前の中間テストはクラス1位や学年10位に入ることができてとてもやりがいがある結果がでて、自分の自信になりました。高校スタートダッシュは無事のりきれたのでこのまま気を緩めることなく頑張りたいと思います。

そしてもうひとつ頑張っていることは、部活動です。部活は写真部に入りました。でもカメラや道具の事で親と喧嘩してしまって一日以上、一言も口を利かないこともありました。それでも憧れだった写真部に入って、み

んなの頑張っている部活の様子をおさめたい、一瞬しかないキラキラした青春で溢れている所を自分の手でカメラにおさめたい、という思いを話して無事写真部に入ることができました。部活内のメンバーみんなとも仲良くなって、みんな和気あいあいと他の部活風景を撮影したり、学校行事でみんなが楽しんでいる青春溢れる場面を撮ったり、とても楽しく活動しています。そんな写真部の中で一番のコンクール、写真甲子園で近畿代表になれるよう 3 年間経験を積んで頑張りたいと思います。

まだ高校生になって半年、これから今よりもっと大変な事、楽しいこと、時には苦しい事もあると思います。

また写真部の先生がおっしゃっていました。

「苦しい事も楽しい事もいつかは思い出の 1 ページとなる。その 1 ページを見返した時、どんな風に映るかはあなた達の努力次第。またその映すお手伝いをするのが写真部の役割だ。」と。

この事を胸にこれからの高校 3 年間今よりもっと頑張っていきたいと思っています。

L さん(15 期生)

『高校生活の 9 分の 1 を振り返る』

高校に入学して 3 ヶ月が経ちました。たくさん素晴らしい人と関わり、チームワークを大切にすることで、私の世界が広がりました。

ともに学校生活を過ごす 3 ヶ月の間、同じクラスの人のことについて少しですがいろいろ知ることができました。K 高校総合理学科の一人一人の仲間が優れた頭脳の持ち主であるのみならず、自分なりの何かを持っていると実感しました。数学を研究することが好きで、絵がとても上手い子とか、落ち着いた雰囲気ピアノが驚くほどうまい子とか、野球で全国に行けてリーダーシップの強い子とか…みんな、自分なりの特徴を持っていて、周りの人とリスペクトし合いながら充実した毎日を過ごしています。こんな素晴らしい仲間たちと一緒にともに高校 3 年間を送れることは本当にラッキーだと思います。私は今、K 高校総合理学科に入学して本当によかったと心から思っています。

私は、自分の特技であるプログラミングを活かして、自治会に入り、ICT 関係の仕事をしています。先輩と一緒に体育週間の得点集計のシステムを制作したり、文化祭の予約システムの管理をしたりしています。これからの 2 年間で自治会の活動を頑張っていきたい、自分のプログラミング能力の向上にもつながると考えます。

理数が豊富なカリキュラムの中、私は科学研究の楽しさを知ることができました。総合理学科では、毎週火曜日にサイエンス入門という 100 分の授業があります。この授業で科学の実験をたくさんして、研究の本質と基本を教わります。チームに分かれて小さい研究を行い、自分なりに考察してレポートを提出します。結論までの最短ルートを見つけるのが大変でしたが、チームワークを通じて一つの問題を探ることにとっても魅力を感じました。たくさんの実験の仕方を習得することも楽しいです。また、私は今年の 7 月 10 日に行われた全国物理コンテストに参加しました。実験レポートと理論問題の二つのパートがあって、試験は全国統一の時間で行うのですが、レポートは締め切りまで各自で提出することになっています。レポートの実験は同級生と二人で行いました。与えられたテーマに基づいて、実験方針を立てるのにたくさん迷いました。いろいろ論文を読んで、先生のアドバイスを聞いて、ようやく二人とも納得した明確な方向性を確立できました。実験の最初は理想値との誤差が大きかったのですが、考察の部分でその原因を探り、計算で実験の正確性を確かめることができました。

私は 4 月末から KFC のボランティア活動に週一回参加しています。自分の経験を活かして、外国ルーツの子どもの役に少しでも立ちたいという思いから始めました。支援している子供の学習の意欲を上げるための

工夫や努力をしました。動詞活用の表と一緒に作成してプリントアウトして勉強するなど、子供たちが成長するのを見て、私もまた、成長することができました。

中学校から高校へと、新しいステージに上がりました。私は井の中の蛙から大空を自由にはばたく鳥にかわり、もっと広い空を見ることができました。以前心配したり悩んだりしたことも今思い返せば全部小さなこと。人間は人と関われば関わるほど、勉強すればするほど、世界の広さに気づき、自分の無知さを知ります。だからこそ、もっと謙虚となり、人間として成長してゆきます。まだまだ 9 分の 1。もう 9 分の 1。私はこれからも花の高校生活を楽しんで、いっぱい成長したいと考えます。

〇さん(14期生)

『「血を売る男 - 許三観売血記」感想文』

「血を売る男」は一般人の「生きる」物語です。「生きる」に比べてより多くの人物の人間性を表現しています。

「血を売る男」は、著者のもう一つの作品「生きる」の基本テーマである人生の困難を継続して扱っています。違いは主人公である許三観は何度もの生活困窮に対して自分の血を売り、それを繰り返すことで困窮を乗り越えていった点です。

許三観にとって彼の世界に対するアプローチは「血を売る」ですが、毎回、血を売るたびに著者の筆の下で違う人生の意味を持っています。血は中国人の生存観念の中でとても重要な地位にあり、血と生命はほぼ同等な地位にあり、本質的には血は「生命の源」ですが、許三観はまさに「生命」の裏切りをきっかけに、生命を救い、尊重したのです。

許三観は全部で十二回の血を売った経験があり、最初と最後の二回を除いて、残りの十回の中で七回は自分の息子一楽のために、一回は二楽のために、一回は私情のために、一回は家族のために、その血を売り、基本的に彼の望みを成し遂げました。彼の血は売れるほど尊いものでしたが、彼の生命力はますます強くなり、彼の血は家族・子供・妻のために売られ、彼の生命は自然に彼らの生命を持続させたのです。小説のポイントは許三観が相次いで七回血を売って一楽を救うことですが、実は、一楽は自分の息子ではなく、妻と他の人の私生児だったのです。

中国という非常に伝統的な国では、妻の裏切りは夫に男としての尊厳を失わせます。道徳観念に駆られ、許三観は自分の血で「他の人の息子」を扶養することを決心して、明らかに身体と心理の二重の試練に耐えないといけないということになりました。

許三観の血を売る行為は単なる商業行為ではなく、彼の血も単なる「商品」ではありません。血を売ることはタブーであり、父が「子を救いたい」という気持ちで行うとしても、忌避感が生まれます。このような倫理的な葛藤の中で、許三観は依然として一楽のために血を売ることを選び、血のつながった父と子以上の関係を結んでいくのです。

僕は、この本を読んだ時、まるで僕の身のまわりで起こっていることを味わうように感じました。この本には派手なことはないですが、すごく素朴で、真実を感じさせてくれました。

Ｙさん(14期生)

『言語について 多言語を学ぶ苦しさや楽しさについて』

私は日本に来て、もう九年ぐらい経ちました。色んな苦しい思い出がありますが、その中でも特に思い出深

いのは、やはり言葉です。

私は小学三年生の頃から日本の小学校に通い出して、それまでに、日本語を教える塾なども通ったことがないから、私は周りの人と言葉が通じませんでした。何を言っているのかも何もわからず、英語の Yes と No だけで返答していました。自分も相手も伝えようとする意味がわからず、私は変人として扱われたのです。その状態では、私は友達が一人もいませんでした。毎日学校に行き、授業を受けても、何もわからない故に、とても暇でした。日本語の塾に通い始めても、私は小学校三年生なのに、小学校一年生の教科書を暗記させられていました。「これは本当に身になる勉強なのか？この勉強したら本当に同級生と交流ができるのか？」などの疑問がずっと頭で駆け巡っていました。そして私は勉強放棄したかったのかわからないですが、教科書の暗記などやめて、毎日のようにアニメを見ていました。字幕を見ながら、自分がカッコいいと思うセリフを暗記して、口癖になるくらい暗唱しました。自分でも塾の勉強をしないといけないと思いつつも堕落していました。

しかし今から見ると、塾の勉強よりも、アニメを見た方がよっぽど勉強になっていました。塾の勉強が無意味だと指摘するのではないですが、でも無理矢理の勉強より自分からした方が、記憶しやすいし、気分的にも楽なのです。これは特例ではありません。母語という言葉があるように、自分の第一言語というのは小さい頃から聞き慣れて、自然に話し出すのと同じで、私は当時、大量の日本語を聞くことで、母語を作る環境と同じ環境にいたから後にベラベラ喋れるようになったのです。

つまり私が言いたいのは、言葉話すには、それを暗記したり、文法を覚えたりしようとすると逆に喋れないものです。言葉というのは、耳、目、脳などに限らず全身を使って覚えないとはいけません。そうしないと、国語のテストを百点取れても、周りの人と話せない事になってしまいます。私が中学生の時にもそんな人がいました。テストの問題を理解してすらすら解けるのに、なぜか、いざ喋ることになるととても硬い片言になってしまいます。

だから、言葉を学びたいなら、まず多く話すこと、文法は二の次です。

Mさん(14期生)

『夏休みの過ごし方』

私は夏休みの過ごし方について、ルーツのある国であるアメリカと日本を比較して書こうと思います。実際にはアメリカに住んでいたことはないのですが調べたことを元にご紹介します。

まず、夏休みの時期・期間についてです。

日本の夏休みの期間は、小学校・中学校・高校のほとんどが平均一か月くらいです。それに比べて、アメリカは小学校・中学校・高校のほとんどが平均して三か月くらいの休みがあるそうです。なぜそんなに日本や他の国と違いがあるのか。理由を調べてみました。一つ目の理由は、夏の間は子供が家族の農業を手伝うからと言われています。二つ目の理由は、学生は夏休みの間にバイトをして大学に行くためのお金を貯められるからです。普段は忙しくてバイトする時間がない高校生が多いため夏休みが最適です。実際に、アメリカでは高校生が夏の間のみっちり働くというのは一般的なことだそうです。三つ目は、夏休みは家族と旅行などを一緒に過ごし、子供のストレスを無くすためです。ストレスフリーの期間を持つことは、子供が幸せになるために必要だと思います。ユニセフの子供の幸せ度の調査によると、アメリカはヨーロッパに比べてあまり良い位置にいませんが、日本よりも上です。やはり、休みを取って楽しいことをするというのは人間に幸せ度をあげるために必要だと思います。日本はヨーロッパと違ってイースターの休みもなく、全体的に休みが少ないです。

また、アメリカでは夏休みは宿題がないそうです。それには、日本と学校の制度が違うという理由があります。アメリカは九月から新学年の二学期制なので。

夏は学年の切り替え時期にあり、長期休みを入れるのに都合がよかったといえます。それに、アメリカでは子どもの間に遊びを通して発想力や想像力を養うのが大事で、勉強するのは学習意欲が芽生えた大学生からで十分だと考えられています。そのため子ども時代は価値観や教養の幅を広げられる読書が推されているのです。私は、ここまで調べて、アメリカは単に子供が休むために長く夏休みを設けているのではなく、将来のことまでしっかり考えていることを知り驚きました。勉強ばかりではなく、勉強以外の事をして子供達の経験を増やしてあげることが大切だと思いました。

〇さん(13期生)

『文芸コンクールを通じて』

(短歌)

寂しいと 君が爪弾く旋律に
僕との記憶を 乗せてあげてよ

この短歌は私が高校二年生の時に作ったものです。兵庫県総合文化祭文芸部門に提出し、入賞させていただきました。何故か一人悲しげにピアノを弾く想い人を見守りながら、切ない想いを募らせる青年に成りきって詠んだ恋の歌なのですが、これが賞を頂いたと知った時には、嬉しさで胸がいっぱいになりました。

コンクールが終わった後には、受賞作品を纏めた冊子を頂きました。そこでの出来事です。審査員の方が、その想い人が奏でた楽器がギターであると解釈されているのを発見しました。

その事を知った時、「自分の作品ってそんな解釈も出来るんだ」と、とても興味深く感じたのを覚えています。さらに言うと、読み手と私の中で思い浮かべた情景に差が生じたという事に感動して、それが嬉しかったのです。

何か文芸作品を作ろうと思う時、大抵の場合、私の中には表現したい情景がはっきりと浮かんでいます。そのイメージを崩さない為に、文章を書き出す段になると、その情景が出来る限り明瞭に伝わる様な語彙を選ぶよう心掛け、使用する漢字、平仮名と片仮名の使い分け、句読点の一つに至るまで、与える印象の差を全力で考慮しながら文章を連ねていきます。そんな姿勢を延々と貫いてきた所為か、もし他人が自分の作品を読んだとして、何を思い、感じるかまで深く考えた事はありませんでした。だから、審査員の方の予想外の解釈に余計に驚いてしまったのです。今思い返せばそんな事は別段不思議な事でも何でも無いのですが、その時の私にとっては、それが、捉え方の違いというものを身をもって体験した初めての経験で、印象的な出来事のように思えました。

私は、このような捉え方の差こそが文芸の醍醐味なのだと信じています。文芸作品は、読み手によって様相を変える。これが、今の私の中にある書き手としての考え方です。一度筆者の手の内を離れた物語や詩が自由を獲得し、自分が紡いだ言葉が、元々自分が与えた意味以上のものを獲得する。これはとても喜ばしい体験なのでは無いのでしょうか。

私は今、もう文芸部を引退していて、小説や詩を書いたりする機会も大きく減ってしまいました。大学に入って余裕が出来たら、またゆっくり、言葉の世界と向き合いたいと思います。そして、自分の創った作品が何らかの形で多くの人の目に触れて、人々の心に様々な痕跡を遺していったらと、そう願っています。

D さん(13 期生)**『夏休みの過ごし方』**

私はこの夏休みを有意義に過ごしたいと考えています。そのためには、しっかり夏休みの計画を立てることが大切だと思いました。そこで私は一日8時間勉強することを目標として、実践しようと思います。志望校は決まったので入試科目に必要な勉強に力を入れて努力していきたいです。現在自分の学力がどのくらいあるのか、自分のレベルを理解するためにも模擬試験をたくさん受けて経験を積んでいきたいです。本番までまだ時間があるので、自分ができる最善のことをして頑張りたいと考えています。また、夏休みは学校に行かないので生活リズムが乱れやすくなると思うのでメリハリのある毎日を過ごせるように意識したいです。できるだけ普段学校があるときと同じように決まった時間に寝て、決まった時間に起床できるように心がけます。メリハリをつけて勉強をするためには、リラックスできる時間も確保することが大切だと思うので適度に運動をして体を動かしたり、音楽を聴いたりしてリフレッシュしてから最後まで途切れずに勉強に集中し続けられるようにします。私は長時間勉強することがあまり得意ではないので自分で工夫をしながら、一日一日しっかりと勉強に向き合う時間を作りたいと考えています。大学受験を予定しているので、夏休みの過ごし方は合否を左右する大切な要素の一つだと思います。まずは、この夏休みのスケジュールを管理することと、できるだけ学習の量を増やすことを目標に努力したいです。また、長時間勉強する耐性を身につけ少しでも志望校の合格ラインに近づけられるように頑張りたいです。私にとっての一定のやり方と正しい勉強法を身につけていき勉強の効率と効果がアップできるようモチベーションを高く保って集中できるようにしたいです。あとは、夏は体調を崩しやすいので健康管理をしっかりして元気に過ごしたいと思います。

M さん(13 期生)**『暇つぶし』**

ふと、「音楽は、どんなジャンルであっても、必ず他のジャンルの音楽と繋がっているのだろうか。」とボーッと音楽を聴いている時に考えた。やはり、色々な音楽を聴いていると、どのジャンルでも似ているところが多少見つかることがよくある。でも、あまりそういった話は聞かない。そこで僕は、2つの実験を試みることにした。

1つ目の実験は、ジャンルも、地域も、境界も、全く関係を持たない二つのアーティストを挙げ、片方のアーティストから、Spotify や、Apple music などに出てくる関連アーティストで、少しでも近いなど感じるアーティストを辿っていき、最終的にもう片方のアーティストまでたどりつくことができるのかという実験だ。今回挙げたアーティストは、竹内まりやと、Aphex Twin だ。二方とも大御所だが、地域も、境界も違えば、ジャンルも違う。なかなか難しいのではないかと自分でも感じた。だがしかし、実験開始から 5 分足らずで、竹内まりやからスタートして、25 人以内のアーティストを辿って Aphex Twin にたどり着いた。そこで僕は、両方とも大御所だったのがいけなないのかと思い、マイナーなアーティスト同士で試してみたが、同じ結果になった。

(ちなみに、中にも例外はいて、EXILE で試してみたところ、同じ境界のアーティストをぐるぐる回っているだけだった。)

そして、2つ目の実験は、似ていると感じた要素を発見した、全く違うジャンルの要素を、双方の間で交換して、違和感なく聴くことができるのかという実験だ。今回試したのは、パンクロックと、テクノミュージックだ。(クラシックとテクノでも実験はできたが、僕の作曲の技術でクラシックを作ることはどうしても無理なので今回は断念した。)こちらもかなり難しい気がしていた。だが、二つともしっかり違和感なく聴くことができ、なかなか面白い音楽ができたように感じた。

この実験によって、どんなジャンルであっても、必ず他のジャンルの音楽と繋がっていることがわかった。では、この実験をすることで、何か意味はあったのか。一般の人たちにとっては、何の意味も無いように感じるが、作曲者である僕からすると、かなり意味のある実験だと思った。なぜなら、二つ目の実験でやったことを作曲中に生かすことで、さまざまな音楽からインスピレーションを受ける一つの手段が生まれると感じたからだ。しかし一般の人からしても、新しい音楽の聴き方ができるので、なかなか良い実験になったのではないかと感じた。

Sさん(12期生)

『高校生活後半年になりました』

高校生活もあと半年になりました。私はみんなより二年遅くなっています。

一学期にはいろいろな行事がありましたが、体育大会と修学旅行について思い出を書きたいと思います。

体育大会は二年ぶりでした。私にとっては、最後の体育大会です。出場した種目は綱引きです。最初は一年生と私達四年生が勝負しました。一年生には最後になんとか勝てました。四年生みんなの体操服が汚れていました。一生懸命頑張った証拠です。二回目の勝負は二年生と四年生になりました。残念ながら二年生の勝ちでした。最後は負けてしまいましたが、みんなで力を合わせた証拠の汚れた体操服が思い出となりました。

修学旅行は六月中旬にありました。梅雨の時期なので、心配しましたが、二日とも晴れて、本当によかったです。滋賀県と三重県に一泊二日でした。初日は滋賀県のためき村、琵琶湖、琵琶湖水族館へ行きました。

ためき村では、土でいろんなものを作ることになりました。私は茶碗を作ることに挑戦しました。なかなかいい形にならなくて、どうしたらいいのかわかりませんでした。そこで指導してくれた専門の方に「どうやったらうまくいきますか?」と尋ねました。アドバイスがもらえたので、なんとか形になり、きれいな茶碗ができました。

続いて琵琶湖水族館でしたが、私は興味がわからず、少し面白くなかったです。

二日目は朝一から三重県のナガシマスパーランドへ行きました。友達と二人で白鯨というジェットコースターに乗りました。乗る時はそんなに怖くないと思っていましたが、実際はとんでもなく怖かったです。百八十度回転するので、早く止まってほしいと思いながら乗っていました。やっとの思いでジェットコースターから降りる時、「もう二度と乗りたくないね。」と話しました。その他にもいろいろな乗り物に乗り、楽しく過ごしました。学校までのバスの中では、全員爆睡でした。

ずっとコロナが続く高校生活だったので、修学旅行自体どうなるのかと思っていました。修学旅行に行けた、ということが、何よりの思い出となりました。